

床の間からミフラーブへ：日本のモスク建設にみる在来建築との折衝

37-196079 大場 卓

0. 序：なぜ床の間はミフラーブになりえたのか

0.1 研究の背景と目的

イスラームは厳格な宗教と捉えられがちである。しかし、その礼拝空間にあたるモスクには、しばしば転用が見られる。たとえば、日本では民家を転用し、床の間を聖なるニッチ(ミフラーブ)にしている事例がある。ミフラーブは基本的に上部にアーチがかかった半円形の凹みであり、そのような定型的なあり方から床の間は大きく逸脱しているにもかかわらず、それがそのまま使用されている。この事例は、モスク建設の姿勢が厳格であるというよりむしろ、在来の建築文化との折衝において寛容・柔軟であることを示唆している。この点に着目し本論文では、定型からの逸脱がどのようにモスクで生じるのか、日本のモスクを用いて明らかにすることを目指す。

0.2 研究の対象

日本のモスクは、1935年に最初の事例が確認できるものの、その建設数が増加したのは1990年以後で¹、モスク建設の歴史はまだ浅い段階にある。本研究では、「ISLAMのホームページ²」に掲載されている98件に既往研究ならびにインターネット上に記載があった17件を足した115件のモスクを調査対象とする。

0.3 研究の方法

店田廣文らによる「日本のモスク調査³」等既往研究、Google MapのStreet Viewや掲載写真、各モスクが運営するホームページ等インターネット情報の精査、16件の実地調査、取材依頼を行った21件の内返信があった12件に対するインタビュー調査に基づいて、全モスクのデータシート作成および情報整理を行うことで、各モスクの建設の過程およびその空間や装飾を包括的に明らかにする。

0.4 用語の定義

「モスク」：イスラームの礼拝堂。アラビア語ではマスジド、「ひざまづく場所」を意味する。本論文では建物を所有しているものをモスク、借りているものをムサッラー(礼拝室の意)と称す。「折衝」：利害関係が一致しない相手との問題を解決するために、かけひきをすること。また、そのかけひき、という一般的な意味で用いる。(デジタル大辞泉より)

0.5 既往研究

日本のモスクは、店田らによる一連のモスク調査等社会学の視点で研究されているが、建設に至る経緯の記述にとどまる。建設方法と空間に着目した研究は、宇高雄志⁴による神戸モスク研究のみで、歴史的モスクを除く100件以上の日本のモスクの全体像はいまだ明らかにされていない。

転用を対象とする研究には、大規模転用事例のデザイン手法分析が多い一方、小規模な事例は限られる。また、宗教建築から世俗建築への転用の研究は見られるものの、世俗建築から宗教建築への転用事例を対象とした研究は見られない。

0.6 本論文の構成

本論文は以下五章ならびに序章、結章より構成される。一章ではモスク史研究を再利用の視点からレビューをする。次に二章で日本のモスク建設における再利用、特に転

用の立ち位置を明確にした後、三章で転用モスクの分析を通して、どのような経緯で定型からの逸脱が生じるのかを考察する。四章では新築モスクの分析を通して、転用したモスクの建て替えにあたる新築事例にのみ逸脱が見られることを示した後、五章でその逸脱が転用モスクから継承された可能性を、事例をもとに考察する。

1. 再利用の視点から捉えなおす世界のモスク史

本章では、既往研究に基づき、再利用⁵の視点からモスク史を捉えなおすことで、モスク史研究における本研究の位置づけを明確化する。

1.1 定型的なモスクの構成要素

モスクは身体を清め、メッカに向かって礼拝するという行為のための空間である。礼拝の方向(キブラ)を示すミフラーブ(壁龕)、礼拝を主導する人物が座るミンバル(説教壇)、礼拝時刻を呼びかけるためのミナレット(尖塔)とドーム等を伴う定型的な構成が存在する(図1)。

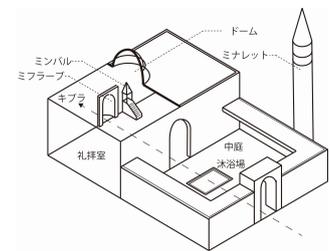


図1 定型的モスクの構成要素

1.2 モスク史に見られる再利用

各地域固有のモスクを対象とした研究は多く、転用や部材転用、増改築等、再利用に着目している研究もある⁶。この視点でモスク史を辿ると、そもそも先述の構成要素の多くが再利用を契機に形成されたことが見て取れる。また、シリアがイスラーム化した初期に建設されたダマスカスのウマイヤ・モスク(714年)、スペインがイスラーム化した初期に建設されたコルドバの大モスク(786年)も、それぞれ既存建築転用と部材転用という再利用によって固有の空間を形成した。こうした再利用は大規模な事例に限らない。マレー半島に群として存在する長屋型モスクは、その形成要因として僧院の転用が指摘されている⁷。以上のように、異文化混交の歴史であるモスク史⁸では、再利用の事例が特に各地域のモスク建設黎明期に多く見られる。

1.3 近現代欧米のモスク建設と再利用

欧米や韓国等は日本と同様、過去100年でモスクの建設数が一気に増加している。アメリカでは、2000年から2011年にかけて建設されたモスクは56%が新築であったが、2000年以前のモスクは転用が68%を占めていた⁹。またドイツでは、ケルン中央モスク(2018年)等近年大規模新築事例が増加しているが、以前は多くのムスリムが職場や住宅付近の既存の空間を活用した「裏庭モスク」で礼拝をしていた¹⁰。現代においても、モスク建設の多くは再利用から始まっていることがうかがえる。

1.4 小結：再利用のモスク史における本研究の意義

以上のようにモスク建設では、特に新しい土地にモスクが根付く初期の段階で再利用が多く見られ、それが各地域固有のモスク形成に密接な関係をもつと考えられる。しかし、関係のある事例の多さにもかかわらず、そのプロセス、

つまり再利用に至る判断、在来建築との関係、再利用時の手法や所作の創造性が精査されているとは言えない。その精査のためには、施主や設計者の思考、さらに既存建築や敷地、構法や法規等多様な因子の絡まりあいの全体像を分析することが必要だと考える。近現代以後モスク建設数が増加した国々でも、依然として上記を扱った研究はない。よって現在進行形の、モスクと在来建築との折衝を見るべく、日本のモスクを対象として分析を行う。

2. 日本のモスク建設史

本章では、日本のモスク建設における、転用を中心とした再利用の歴史的な位置づけを明らかにする。

2.1 社会変動に応じる日本のモスク建設

日本におけるモスクの歴史は、戦前期のソ連を逃れたタタール人やインド人商人によるモスク建設に始まる。戦後80年代までは大使館等に付属する礼拝室の建設にとどまったが、バブル期日本に出稼ぎにきたパキスタン人やバングラデシュ人の増加を背景に、モスク建設が一割モスクを先駆として各地で興った。2000年代以後は、技能実習生や留学生としてインドネシア人が増加し、モスク建設の主体が変化していく。以上のように日本のムスリムコミュニティは、社会変動に応じて、コミュニティを拡大、資金を調達してモスクを建設してきた。

2.2 日本における礼拝空間の段階的な移行と更新

ここでは、店田らの既往研究および各モスク運営のホームページ、Google Map の掲載写真および Google Street View の年代比較をもとに整理した、建設方法を含む各モスクの建設史を分析する。

日本のムスリムコミュニティは、集団での礼拝空間を迅速に確保するため、元雀荘の部屋を借りている歌舞伎町ムサッラーのように、まず既存建築を借りて礼拝空間とすることが多い。そこで資金集めを行い、次の段階として自らが所有する礼拝空間の建設を目指す。購入してすぐ礼拝できることもあり、調査した114件の内94件(82%)が転用によりモスクを建設している。残り20件(18%)は福岡モスクのようにコミュニティ外からの資金調達に成功し、新築でモスクを建設していることが明らかになった。

また、つくばモスクのように、礼拝者数の増加に伴って転用モスクを取り壊し、新たにモスクを新築した事例が7件見られた。御徒町モスクのように現在建て替えを検討している事例は5件あった。また、同じ動機をもちながら転用モスクを大規模に改修しなおす横浜モスクのような事例も3件確認できた。以上のように、日本における礼拝空間は、既存建築の使用から転用へ、そして一部では転用から新築への段階的な移行が見られる(図2)。

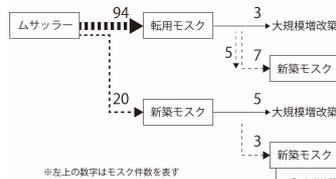


図2 段階的な空間の更新

2.3 小結：最初の選択肢としての転用

モスク建設黎明期の日本では、最初の選択肢としての転用が選ばれ、その後空間の更新に伴い新築の事例が増加していくことがわかった。この背景には、礼拝空間の必要性和継続性、礼拝者数の増加傾向等がある。

3. 転用モスク：在来建築のモスク化

本章では、94件が最初に選択する転用モスクを対象とし、その介入の手法を分析することで、定型的なデザインからの逸脱がどのように生じているのかを考察する。

3.1 用途と構成要素に基づく介入手法の分析

転用以前の用途に基づきモスクを類型化し(図3)、モスクの構成要素に着目して各類型の分析を行った。既存建築の用途は事務所、工場、店舗、集合住宅、戸建住宅の五つに、モスクの構成要素としては、キブラ壁、礼拝室、沐浴室、動線、外観の五つに分けて分析を行っている。

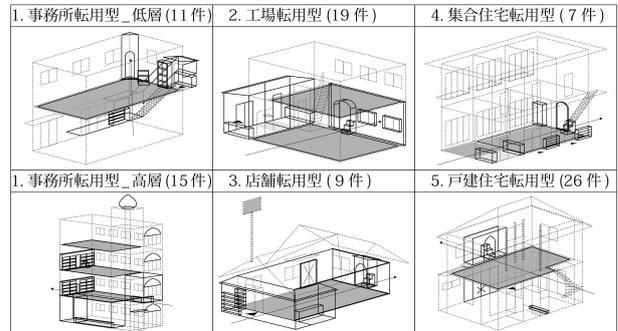


図3 各類型における介入のアイソメトリックダイアグラム

3.2 礼拝方向と面積の確保

基本すべてのモスクに備わる沐浴室は、水で身体を清める空間であり、冬季を鑑み室内にあることが望ましい。よって事務所転用型では、位置を確認できた16件のうち12件が室内に沐浴室を設置している。しかし、床面積が概して狭く礼拝室の面積確保が難しい戸建住宅転用型では、位置を確認できた16件のうち3件のみが室内に設置している。沐浴室の位置が、面積の確保に影響を受けていることがわかる。これは靴脱ぎ場の位置に関しても同様である。

ミンバル(説教壇)は礼拝方向を示すミフラーブ(壁龕)の脇に設置されるものである。日本では面積確保のためそもそもミンバルを設けない事例が33件ある。また、両者を設置する54件のうち34件がミンバルをミフラーブの中に収めている。両者を設置する事例のうちミンバルをミフラーブの中に収める割合に着目すると、概して狭い傾向にある戸建住宅転用型では14件中13件(93%)、事務所転用型では17件中7件(41%)となっていた。このことから面積の確保がミフラーブとミンバルの位置関係に影響を与えているとわかる。これはミフラーブの設置方法にも共通する(図4)。

このように、空間構成および構成要素の設置方法は、在来建築との折衝に基づく礼拝室面積の最大化に強く影響を受けている。

種類	正対/外正	正対/中壁	正対/中柱	正対/無	隅/中壁	隅/中柱	隅/無
平面 スケッチ (87)	18(21%)	12(14%)	15(17%)	12(14%)	9(10%)	13(15%)	8(9%)
1(26)	3(12%)	5(19%)	5(19%)	4(15%)	2(8%)	5(19%)	2(8%)
2(19)	5(26%)	2(11%)	3(16%)	5(26%)	4(21%)	0(0%)	0(0%)
3(9)	3(34%)	1(11%)	2(22%)	0(0%)	1(11%)	1(11%)	1(11%)
4(7)	0(0%)	1(14%)	2(29%)	0(0%)	1(14%)	1(14%)	2(29%)
5(20)	7(27%)	3(12%)	3(12%)	3(12%)	1(3%)	6(22%)	3(12%)

図4 類型に基づく構成要素分析の例：ミフラーブの設置方法

3.3 構成要素の実現にみる寛容さ

定型的なモスクに見られる構成要素をすべて備える事例はあるが、ドームの設置が13件にとどまるなど、設置に対する固執は見られない。また、デザインにおいても同様に、本棚を二つ並べただけでミフラーブとする事例があり、その許容範囲の広さがうかがえる。さらに、在来建築の空間を活用することによる構成要素の実現も見られた。例えば御徒町モスクは、屋上に飛び出した階段室を、ドームをのせ壁面に塔を描くことでミナレットとしている。また、大塚モスクは、屋上に設置されていた貯水槽を、鉄板

で囲うことでドームとしている。そして三原モスクは、礼拝方向に位置した床の間を、アーチなどの装飾を付加することでミフラーブとしている(図5)。これらは在来建築の空間的な可能性を見抜き、構成要素を見出していると言える。さらに、定型的なミフラーブとは異なり三原モスクのそれは礼拝方向と異なる方向を向いている。また22件も見られた室の隅にミフラーブを見出す事例も、定型的なミフラーブの在り方とは異なる(図4)。在来建築から見出された構成要素のデザインは、定型的な枠組みからの逸脱の可能性をもっている。

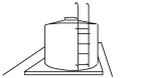
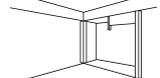
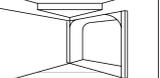
	定型的な構成要素	在来建築の要素	転用モスクの要素
階段室 ミナレット			
貯水槽 ドーム			
床の間 ミフラーブ			

図5 見出しにより生まれる要素

3.4 小結：在来建築を取り込む転用モスク

転用モスクでの介入は、礼拝方向と面積の確保を合理的に追求する一方、構成要素実現に対しては柔軟であり、そのデザインに対しても許容力が極めて高いため、在来建築との折衝による定型からの逸脱が生じている。

4. 新築モスク：敷地・構法・法規との折衝

本章では、近年増加傾向にある新築モスクを対象とし、その設計の手法を分析して転用と比較することで、共通点と相違点を明らかにするとともに、転用を経た新築事例の特徴を明らかにする。

4.1 設計主体と構成要素に基づく設計手法の分析

設計者と施工者の関係に着目して、新築モスクを設計施工分離型6件、設計施工一貫型14件、施主主導プレハブ型7件の三つに分類した。これを用いて以下の分析を行う。

4.2 転用モスクとの共通性

気候、構法に加え、敷地や法規等との折衝は転用同様新築でも求められる。特に設計施工一貫型は名古屋モスク(図6)のように、在来の構法に従うことで建設費を抑える特徴を持つ。その結果、正面にのみ装飾を貼り付けた外観となり、転用モスクと類似する。また、ミフラーブは外に凸部をもつ事例が27件中14件と多い。こうした事例も一部海外で見られるが、一般的とは言えない。転用と同様、礼拝室の面積を最大化するためと考えられる。



図6 無装飾の名古屋モスク側面

4.3 新築モスクで強まる構成要素

新築モスクでは、構成要素の実現割合が高い。ドームやミナレットの設置は、転用で約14%であるのに対し、新築では約50%で見られた。また、キブラに従いつつ壁面と正対する形での礼拝を理想とすること、内装仕上げにおいて白色を選択することが、その割合の高さからうかがえた。

4.4 転用を経た新築モスクに見られる非合理的な逸脱

新築モスクを分析していくと、敷地に余裕があるにもかかわらず、建物がキブラを向いていない事例があることが

わかった。3章で述べたように、この事例は海外ではほとんど認められない。さらにその角にあたる部分はある程度隅切されている(図7)。他の新築では敷地に余裕がある場合、建物自体がキブラに向いている上、たとえ隅に折る場合でも隅切は見られない。このような、定型から逸脱したように見えるデザインは、他の新築事例にもあるが、それらは共通して転用したモスクの建て替えであった。



図7 以前使用していた転用つくばモスク(左)と2019年に建てられた新築つくばモスク(右)の比較

4.5 小結：転用時の名残が見られる新築モスク

新築モスクの設計手法は、礼拝方向と面積の確保を重視しつつ、転用以上に構成要素の実現力を高めていた。ただし、転用モスクを経た事例に限って、新築ではわざわざ採用しないような逸脱が確認できることがわかった。

5. モスクの更新における継承の可能性

本章では、転用モスクにおいて生じた定型からの逸脱は、礼拝空間の更新を経ても継承されるのか、を考察する。

5.1 なぜ新築でも隅に向かって祈るのか(つくばモスク)

つくばモスクは、2000年に工場を転用してモスクを設立した。その後、転用モスクの面積の不足から、駐車場のために購入していた隣地に新築を計画した。資金と面積の使い方をもとに設計施工会社を決めたという。2019年に建設された新築つくばモスクは、敷地に沿って建物の向きが決定され、室の隅に向かって礼拝をするようになっていた。また、先述のようにその角が隅切されているとともに、外壁における腰壁の高さが高い。こうした特徴は元々使用していた転用モスクと共通する(図7, 8)。

それらの理由を探るために、施主および設計者にインタビューを実施した。まず設計者は、モスクの予備知識がないため、転用モスクで行われる設計相談に加え、提示されたスケッチや写真に基づいて、モスクを理解したという。構造と法規に関わる箇所は設計者が主導したが、それ以外の箇所は施主が決めたようで、上記の特徴は施主の決定に基づいていた。施主によれば、礼拝方向を室の隅にしているのは、礼拝室および駐車場の面積を最大化するためとのことであった。確かに礼拝室の面積を変えず壁をキブラに対して直角にした場合、礼拝室の有効な面積は増加しても、屋外では駐車可能台数が減少してしまう。続いて、角の隅切に関しては、面積と費用を削減するためであったという。ただし、隅を埋めたとしても駐車可能台数は変わらず、むしろ角を埋めることで礼拝室面積を増やすことは可能である。加えて、この隅に柱を落とせば、構造合理性が高まり、コストも削減でき

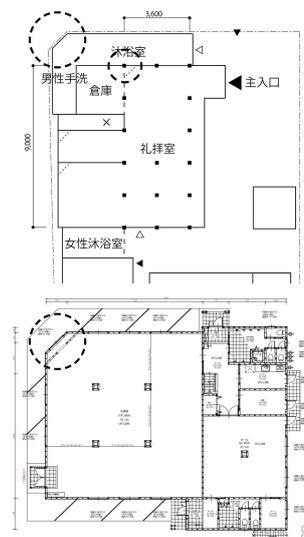


図8 転用(上)と新築(下)のつくばモスク平面図比較

ると設計者は語っていた。

以上のように多くが面積の合理的な活用に基づいて決定されている一方、角の隅切に関してはその合理性からは説明されえないものであることがわかった。この隅切はそのほか新築事例において一切見られない。設計期間中も常に礼拝が行われ、設計者も見ていた転用モスクの外観がまさに隅切を有していたことをふまえると、敷地と折衝した転用モスクの特徴が継承されているとしか考えられない。転用モスク時には敷地境界に従っていたが、その制約が取り払われてなお、再生産される可能性があると言える。

5.2 床の間は真にミフラーブになりうるか（日立モスク）

日立モスクは、2010年に住宅を転用してモスクを設立した。その後2013年末に一部内壁を撤去し礼拝空間を拡張したのだが、それまでは床の間に向かって礼拝をしていたのが特徴的であった。環境改善を目的とする別敷地での建て替えのため、継続的に土地探しを行い、2015年末土地の購入に至った。その際、寄付の呼びかけ用に掲載していたイメージパースを見ると、ミフラーブが建物の隅にある。敷地形状から礼拝方向を考えると、その隅に向かって礼拝をすることが推定されるが、そのミフラーブの在り方が、まさに日立モスクの床の間を想起させる(図9)。

この理由を探る上で、関係者に連絡をしたが、このパースを描いた人物は当時日本に留学をしていたインドネシア人で、既に本国に帰国してしまっていたため連絡が取れなかった。出身国のインドネシアでもこのようなミフラーブは見られず、日本の他の新築モスクにも類例はない。隅に祈るすべての事例が、キブラと正対できる壁とニッチを設けミフラーブとしている。もちろんこれは初期設計案でその後変更される可能性もあるが、これが立案され、日立モスクのコミュニティに拒否されることなく、公に掲載されたことは事実である。この事例は礼拝者のコミュニティが、転用の結果やむなく生じた床の間ミフラーブという逸脱すら違和感なくとらえ、継承、再生産する可能性を示している。



図9 転用日立モスクと新築日立モスク設計案の比較

5.3 逸脱を修正するのは誰か（横浜モスク）

横浜モスクは、2006年に食品工場を転用してモスクを設立した。その後、雨漏りや内装材の劣化等を背景に、2020年に大規模な改修を行った。資金や手間とあわせ、礼拝の継続性を重視し、新築を選択しなかったという。しかし、改修には約1億円かけており、その前後で印象は大きく異なる。施工会社は日本の会社で、それとは別に日本人設計者がいた。内部空間を伴うドームやミナレットの設置、動線の整理等とあわせて、室の中心線にあわせた擬柱4本が挿入された(図10)。もともとの横浜モスクにおいては、ミフラーブが壁中央に据えられていた一方、柱位置は中心からずれて左右対称ではなかった。とするとこの大規模改修が、空間における中心性の欠如という逸脱を修正したと考えられる。なぜこの改修時に、柱の配置にまで中心性が導入されたのだろうか。

施主にその意図を伺ったところ、擬柱の導入は礼拝室に中心性をもたせるためとのことであった。ただし、それは

日本人設計者の提案によるものだという。つくばモスクでは、設計者がモスクの知識不足を理解したうえで、要望の受け入れおよび構造と法規の調整を徹底していたが、横浜モスクの設計者は要望に応じた構造的、法規的提案に合わせ、中心性の導入を提案していた、ということになる。

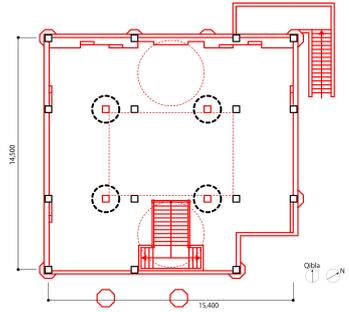


図10 新横浜モスク 2F 平面図

よって、この柱配置に中心性を持たせるといった逸脱の修正は、設計者というコミュニティ外の存在を取り込むことで生じたのである。

5.4 小結：逸脱の継承メカニズム

モスクの更新においては、意識的な継承ではないものの、合理的に説明されるわけでもない、定型からの逸脱の継承が見られる。よって、建て替えを経たとしても、転用モスクで生じた定型からの逸脱は継承されうる。この背景には、集団的な意識の変化、モスク観の変容があると考えられる。一方で、もちろんより定型に近いデザインに改修する場合もある。ただし、必ずしも利用者の意図ではなく、在来建築家の存在もモスクの変容を考えるうえで重要な存在であることが分かった。

6. 結：在来建築との折衝を通じた定型からの逸脱

転用がモスク建設黎明期の中心的な手法であること、そしてその転用に見られる寛容なデザイン手法が、在来建築との折衝に基づく定型からの逸脱を生じさせていることが明らかになった。また、たとえ礼拝者数の増大に伴う建て替えを行ったとしても、その逸脱は継承されうる。その背後には、礼拝行為を通じた集団でのモスク観の変容が考えられる。以上のようにモスク建設には、在来建築を取り込んで定型から逸脱していく可能性が組み込まれていると言えよう。今回は日本を事例に検証したが、この現象は日本以外でも見られることが予想され、今後の海外事例研究への応用が期待できる。

〈図版出典〉

図1, 2, 3, 4, 5, 8上, 10: 筆者作成. 図6: 「早稲田大学滞日ムスリム調査プロジェクト」. 参照 2021/1/11. <https://imemgs.com/>. 図7左: 「茨城県つくば市」 google map, street view, 2017. 参照 2021/1/11. 図7右: 林憲吾撮影. 図8下: 日栄商事株式会社提供. 筆者が一部加筆修正. 図9左: 「Ar Rahman Mosque in Hitachi - Japan」 World Beautiful Mosque Pictures. 参照: 2021/1/13. 図9右: 「Hitachi Masjid Japan」 Facebook. 参照: 2021/1/13.

〈注釈〉

- 1 店田廣文. 2015. 『日本のモスク 滞日ムスリムの社会的活動』. 山川出版社.
- 2 「イスラムのホームページ」. 参照 2021/1/12. <http://islamjp.com/>.
- 3 店田廣文, 岡井宏文. 2008, 2009. 「日本のモスク調査 1, 2-イスラーム礼拝施設の調査記録一」.
- 4 宇高雄志. 2017. 『神戸モスク: 建築と街と人』. 東方出版.
- 5 加藤耕一. 2017. 『時がつくる建築: リノベーションの西洋建築史』. 東京大学出版会.
- 6 スチールラン・アンリ(著), 神谷 武夫(訳). 1987. 『イスラムの建築文化』原書房
- 7 Wayne A. Bougas. 1992. 'Surau Aur : Patani Oldest Mosque' *Archipel*, volume 43, 1992. pp.89-112
- 8 Fethi, Ihsan. 1985. 'The Mosque Today' *Architecture in Continuity. Building in the Islamic World Today*. pp.53-62. New York: Aga Khan Award for Architecture/ Aperture.
- 9 Ihsan Bagby. 2012. *The American Mosque 2011*. Islamic Society of North America.
- 10 石川真作. 2010. 「「裏庭モスク」から「統合・文化・教育センター」へ ドイツの都市におけるイスラーム団体 VIKZ の黎明期と現在一」. 人間学研究: 京都文教大学人間学研究所紀要 11. pp.55-69

〈他主要参考文献〉

- 1: 桜井啓子. 2003. 『日本のムスリム社会』. 筑摩書房. 2: 深見奈緒子. 2013. 『イスラーム建築の世界史 岩波セミナーブックス S11』. 岩波書店.